

# バナナが売っている

## — 新しい文法形式の成立要因について —

谷守正寛

甲南大学全学共通教育センター  
神戸市東灘区岡本8-9-1, 658-8501

### 要旨

本稿では、近年聞かれるようになったという「(バナナ)が売っている」という新しく発生しつつあると思われる文法形式について、稿者が観ていたテレビ番組の中で話されている場面で、同時に示された字幕にはっきりと文字化されているのを見て、その浸透ぶりが改めて窺えたことから、その成り立ちの原因を考察することにした。これは非文法的な形式とされながらもその成立要因ゆえに、徐々に文法化されつつあるとみてよいだろう。そこで、そこに文法上の合理性があると考え、考察した結果、「～て」の従属句としての構造的特性と、「いる」の意味機能的な特性との整合的な組み合わせによってこの表現形式が成立しつつあるという考えを述べる。

キーワード: が売っている, いる, ている, ある, てある

## 1 はじめに

「～が売っている」という文法形式については、『イチゴが売っていたよ』のように、物を主語にした『～が売っている』の形が時に見られるが、文法的には誤り(『明鏡国語辞典第二版, 2011-2016年』大修館書店)という説明があるように、現状ではまだ文法的に適切な表現とは見られていないようである。その理由としては「売る」が他動詞であり、「～が+他動詞+いる」という語の組み合わせが従前より歴史的にも日本語に存在しなかったことが考えられる。しかし、又平(2001)において当時すでに実例としてネット上に多く存在することが指摘されており、「(規範的な文法からは)逸脱してもなお使われてしまうのはこの表現には規範的な文法に適う表現では表しにくい何らかの特徴があるためだと考えられる」と述べているように、稿者も単なる言い間違いではなく何らかの合理的なメカニズムが働いているとみている。そこで、どういった要因が働いてこうした構文が近年発生しているのかを検討し、表現として成立すべく文法上の整合性について分析することにした。

## 2 「バナナが売っている」形式の文法構造

稿者がたまたま観ていたテレビ番組の画面において直接目にした字幕における新しい文法形式による表現とは、図1のように字幕にはっきりと文字化されていたものである。それまでは商品が売られている現場などで取材のレポーターがこういう表現を使っているのを音声情報として聞くことはあったが、それは単なる言い間違いだろうという認識であったのに対して、この場合は、字幕に明確に表れていたために、新しい文法形式として浸透しつつあるのではないかという印象を受けたのである。

(1)がその際の実例文である。下線は稿者により、以下同様とする。

- (1) 5～6本で198円ぐらいでバナナが売っている。(NHK Eテレ『あしたも晴れ！人生レシピ 無理なく快適に！夏の節約術』，2023年7月21日放送)



図1

つまり、他動詞を使って文法的な文を作るならば、次のような文要素の組み合わせになるはずである。(2)は具体的な物について、(3)は抽象的な事について述べているが、そのことによる表現形式上の違いはない。

(2) ボードにメッセージが書いてある。

(3) 十分に手が打ってある。

(2)の「書く」、(3)の「打つ」はいずれも他動詞であり、そのテ形に「ある」が接続するが、これが文法的に適切な表現であるのに対して、(1)では「ある」ではなく「いる」が接続している。「が」の使用は(1)と同じである。(2)と(3)で「いる」が接続できる場合は、次のように「が」を「を」に変えて表現するのが適切である。

(4) 先生がボードに何かメッセージを書いている。

(5) 手遅れにならないように今まだ手を打っている。

意味的には、(2)では通常は話者以外の誰かがメッセージを書き、書かれた結果の状態が残っているのを、(3)では誰かが手を打ったことが窺えるような結果の様子のみについて述べているのに対して、(4)と(5)ではそれぞれ動作主は話者に限らないが、発話時において、それぞれメッセージを書くという行為と手を打つという行為が進行していることを表し、しかしながら、さらに下のように、文脈によっては結果の状態を指して述べることも可能であろうという点で異なりを見せる。

(6) この古い日記にはたくさん愚痴を書いている。

(7) あとで問題の起こらないように事前に手を打っている。

このように、「～ている」が結果の状態を表すことは、次のようなタイプの自動詞に付いた場合にも確認できる。ただし、「を」は使われない。なお、瞬間的な事態を表す動詞に付いた場合にこうした結果の残存を表すと言えるが、必ずしもそうではないので動詞の種類について詳しくここではふれないことにする。

(8) 財布が落ちている。

(9) 窓が開いている。

上の「いる」については後で考察する際に改めてふれるが、(2)-(3)の「ある」が「が」で表示された「メッセージ」と「手」について述べるべく使われているのと違い、(6)-(7)の場合はそれぞれ愚痴を書いた動作主、手を打った動作主の状態について表現するために使われている。(2)-(3)と「バナナが売っている」との違いについては、「ある」と「いる」の違いをより明らかにしつつ後で述べる。

又平(2001)は当時にすでに「一つの定型構文として成立してしまっている」と述べているように、稿者も前述のように浸透してきていると認識したことで、ここで考察することにしたわけであるが、本稿で扱うこの文法形式は日本語の歴史においてもここ最近になって新しく生まれてきたものと考えてよいだろう。

### 3 「バナナが売っている」形式の特徴

「バナナが売っている」の表す意味は、当然ながら、果物であるバナナが動作主となって何かを売っているわけではなく、売られている物がバナナであるので、「バナナが売られている」、あるいは「店員がバナナを売っている」ということである。しかし、こうした論理的意味にはない独特の意味が含意されるからこそ、この新しい文法形式が現れてきたと推測できる。その独特の意味があるとすればどのようなもので、どのようなメカニズムでこのような形式として表出してきたのかを探ることになる。

まず、田川(2002)が次の比較の例を挙げて指摘しているように、この表現はテイル形でしか使用されない。なお、例文では主語にイチゴを使っている。\*はこれ以降、非文またはその箇所が非文法的であることを示すものとする。

(10) a. \*イチゴが売った。

b. イチゴが売っている。

つまり、「売った」という行為の時点に限定して表現するものではないと言える。これは、テイル形でしか発生しない現象であるということであるから、「売る」という動詞自体よりも、むしろ、後続する「いる」に関わる問題であることの証拠であろうと考える。後述する。

また、田川(2002)の指摘に次のようなものがある。

(11) \*太郎がイチゴが売っている。

(12) \*イチゴがわざと売っている。

これらは、この表現に動作主が全く存在しないことの証左だとしている。たしかに言語形式としては、(11)の示すように動作主を置くことはできない。また、(12)の「わざと」は動作主の意

図性をチェックするテストとして使え、テアル構文の場合は次のように言えることから、「[対象]ガ～Vt テイル」と違って、統語構造に動作主が存在すると結論づけている。なお、Vt は他動詞を指すが、本稿では以後「他動詞」と記す。

(13) 窓にはわざと簾が掛けてある。

しかしながら、テアル形であっても「太郎が簾が掛けてある」と言えないように、動作主が形式的に表れないのは同じことであり、動作主の意図性を表す何らかの副詞句については、「[対象]ガ～[他動詞]テイル」という表現においても、次のように、文脈を整えて入れることが可能なことから、再考する余地があると考えられる。

(14) この辺の店には、わざわざ葉の付いたままの青いバナナが売っている。

「わざわざ」は「しなくてもいいのに故意にするさまを表す語。わざと」(『日本国語大辞典 精選版』)とあるように、やはり動作主の意図性を表すとみてよい。従って、(14)がなお完全に自然とは言えない話者がいるかもしれないとしても、このように本稿では、「[対象]ガ～[他動詞]テイル」という表現に動作主が全く存在しないとすする田川(2002)の考えとは異なり、動作主の存在を少なくとも否定しないこととする。

さて、ブログの記事ではあるが参考にすべき興味深い言述がある。以下の「売っている」と九州の一地域の方で言う「売ってある」との違いについての方言母語話者の内省である。

売ってある

商品が「売られている」こと。例) その商品はデパートに売ってあった。

一般には「売っている」というようですね。「売っている」も使いますが、販売する側が積極的に客に対してアピールしながら売る場合に使います。一方、「売ってある」は、商品がお店においてあって、買いたい人が店員に「これをください」といって買う場合に使います。(にぶろぐ@無人店舗, <https://ryokan.exblog.jp/4914593/>, 2023年10月1日閲覧)

この記事の中では、商品が「売られている」ことを一般には「売っている」と言うようだが、方言では「売ってある」を使うとしていることから、「その商品が売られている」の言い換えとして「売ってある」と言うのと述べていると解釈できる。その上で、方言の表現「売ってある」を「売っている」と比較している。従って、「～が」の問題についてはふれていないものの、方言でも「その商品を売られてある」とは言い得ないことから、「商品」を「を」ではなく「が」で表示した次の2つの文について言及していると考えてよいだろう。

(15) その商品がデパートに売っていた。(当該方言話者も使う表現)

(16) その商品がデパートに売ってあった。(当該方言特有の表現)

(15)と(16)の違いについて、両方を使い分けることができる記事の書き手である方言話者の内省は、似た発話状況で「売ってある」という言い方をしない一般的な話者にとっては分かりにくい点、大いに参考になる。それが、(15)の場合は店員が積極的に客に対して売ろうとアピールしているが、(16)の場合は商品が店に置いてあるだけで店員は客に何も働きかけていないというものである。この説明は当該方言話者でなくとも直感的に同感できようから、あくまで(15)に関する「店員が積極的に客に対して売ろうとアピールしている」という言述は、積極的に売

ろうとしている店員である動作主の存在が含意されるということを意味し、「[対象]ガ～[他動詞]テイル」という表現に動作主（店員）の存在を否定しないとする本稿の(14)でみた考えと符合する。

そこで、次の仮定を設定する。

(17) 「[対象]ガ～[他動詞]テイル」という表現において、積極的に働きかけようとする動作主の存在が含意される。

一方、「[対象]ガ～[他動詞]テアル」と言う場合も動作主の存在が含意されることになるので、両者の比較を含めて改めて後述する。

又平(2001)では、(18)のように、所有権の移動がない場合に「売る」に代えて「売れる」が使えず、他にも自動詞形がないことが、所有権がまだ移動しない段階での「[対象]ガ～[他動詞]テイル」という表現を成立させてしまう要因の一つとなっていると指摘している。

(18) 太郎はイチゴを売っている。(しかし誰も買わなかった。)

そこで、それを受けて、田川(2002)では「～ガ～テイル」という形式に支えられて生み出される動詞「売る」を「疑似自動詞」と呼んで区別しているわけである。

さて、これは「売る」にはその自動詞形「売れる」があるものの、(19)が示すように、所有権の移動がまだ発生していない段階では、「～ガ～[自動詞]テイル」型の「～が売れている」とは言えないことから、そしてこの場合でも都合よく使える「売る」の自動詞形が実在しないために、その代用として、自動詞の置かれるべき箇所に他動詞であるはずの「売って」がやむなくそのまま入り込んできているという論理である。なお、本稿では又平(2001)の「買わなかった」を(19)においては「買わないでいる」と変更した。

(19) 店先でイチゴが売れている。(＊しかし誰も買わないでいる。)

しかし、所有権の移動がまだない段階で商品が陳列されているだけの状態で、(20)のように言えるという文法規範がもとよりあるにもかかわらず、「～が売られている」の代わりに、「売る」を敢えて文法規範を無視してまで疑似自動詞として使い、本来は非文法的な形式である「～が売っている」と言ってしまう理由については特にふれていない。

(20) 店先でイチゴが売られている。しかし誰も買わないでいる。

たしかに、「売られて」は「売る」の受身形であり、助動詞が付いた形であるので、「売る」の自動詞形とは言えないが、一般の言語使用者にとってはそういった文法的な形態にこだわらず、「売られる」が所有権の移動がまだ発生していない段階で自動詞の代替形として十分に役目を果たしうると認識できる以上、「売られる」が独立した自動詞でないことでテイルに前接する資格がないかのように捉えて、他動詞の「売る」を強引に自動詞として使うようになってきているとは、非常に考えにくい。

従って、文法的に適切な「～が売られている」という言い方を避けてまで、「売られて」の部分に敢えて他動詞を自動詞であるかのように使って、「～が売っている」と言ってしまう文法メカニズムの分析は、実はまだなされていないと言える。

「売れる」の場合の動作主については言及しなかったが、(21)のように、主語が商品なので動

作主が形式上なく、その含意もない。

(21) \*店員が／によって) バナナが \*わざわざ 売れている。

ここまでの考察を整理し、結果相を表す「～を売ってある」と上述の方言も含めていくつかのタイプの文の特性を図2にまとめた。方言の「～が売ってある」は「～が売っている」に準じて動作主の意図性の含意を認める。なお、「イチゴ」は本稿の表題に合わせて「バナナ」とし、動作主を仮に「店員」とする。

動作主	意図性	対象	他動詞	自動詞(型)	いる/ある	所有権移動の有無	相	備考
店員が	○	バナナを	売って		いる	有/無	進行/結果	
店員が	○	バナナを	売って		ある	有	結果	
—	×	バナナが		売れて	いる	有	進行	
店員に	○	バナナが		売られて	いる	有/無	進行	
(含意)	○	バナナが		売って	いる	有/無	進行	疑似自動詞
(含意)	○	バナナが	売って		ある	有/無	進行	方言

図2

#### 4 「バナナが売っている」形式の成立メカニズム

さて、所有権の移動が実現していない場合に、自動詞形がないために「～が売っている」のように、他動詞「売る」を疑似自動詞として代用するというメカニズムが働いているとする田川(2002)の考えは、統語構造に動作主が潜在的にも存在しないとみなすことが根拠となっているが、上述のように動作主の意図性の含意を認める本稿の考察とは異なっており、必然的に「～が売っている」における「売る」の疑似自動詞化という捉え方に代わる考えを示さなければならぬことになる。

「～が売られている」も「～が売っている」と同様に所有権の移動がない場合に言えることからみて、文法的にはむしろ正しい「～が売られている」という言い方ができるにもかかわらず、そう言わずに、所有権の移動がない場合に使う「売る」に自動詞形が存在しないということで、敢えて他動詞を疑似自動詞とみなしてまで「～が売っている」と言わざるを得ないとみなすには無理があるように思われるが、その理由も不明のままであるので、これも明らかにしていきたい。

「売る」という一語に特化した格好で他動詞が疑似自動詞化し、新しい形式が発生するという文法体系の変化が起こるといえるのは考えにくい。表現したい発話状況に見合った語を使いつつ背後にある文法規則が合理的に働いて表現形式が変容するとみる方が無理がないと考える。従って、本稿では「売る」はあくまで他動詞とみなした上で考察を進める。

##### 4.1 「～が売っている」の「売って」をめぐって

本稿では、従前の研究のように「ている」を単一の表現形式としてみる捉え方ではなく、「～て」と「いる」に分けて分析する。というのは、上にふれたように、方言の表現として「てある」も存在することから、「～て」を境目にして、「いる」につながるか「ある」につながるかという分岐が、意味的にも構造的にも本質的な違いを生み出しうるので、「ている」と「てある」

を相互に無関係な別の表現として捉えるよりも、共通する「～て」の部分と「いる」か「ある」に分岐するところでどのように意味構造が変わるかを見ることによって、この表現に内在するメカニズムに迫れるのではないかと考えるからである。

「～が～ている」における「～て」の部分はこれまで分析の対象とはならなかった部分である。まだ未解決な部分があるとすれば、あらたにそこに焦点を当てて分析することが何らかの糸口を与えてくれると予想してよいだろう。

そこで、「～て」の部分の従属句としての性格を捉えながら考察を進めることにする。まず、「～て」で終わる従属句（以下、便宜上「テ従属句」とする）には、南(1974, 1993)のいう A～C 類がある。

- (22) a. 太郎は鞆を持っている。
- b. 太郎は、\*花子が鞆を持って、いる。
- (23) a. 太郎は、風呂を出て、部屋にいる。
- b. 太郎は、花子が帰って、一人で部屋にいる。

(22a)のテ従属句は太郎の鞆を持つという行為と太郎がそこにいるという事態とが、同時間帯に同じ空間で付帯して生起している。これを便宜上「同時同場所の付帯状況」と呼ぶことにする。これを従属句として区別するならば、A類の従属句ということになるのに対して、(23)では同時同場所の付帯状況を表すわけではない。(23a)では風呂を出た後に部屋にいるので、2つの事態は同じ時間帯、同じ空間で生起したものではなく、一方の事態がもう一つの事態に付帯した状況でもない。そこで、これを便宜上「事態の継起」と呼ぶことにするが、南(1974, 1993)ではこの従属句はB類として区別される。このタイプのテ従属句の中には、(23b)のように、主文の主語（「太郎」）とは別の主語（「花子」）を「が」で表示して入れることができる（「は」ではできない）。このような違いを、時間軸に沿って事態の生起の有り様が区別できるように図示すると、次のようになる。

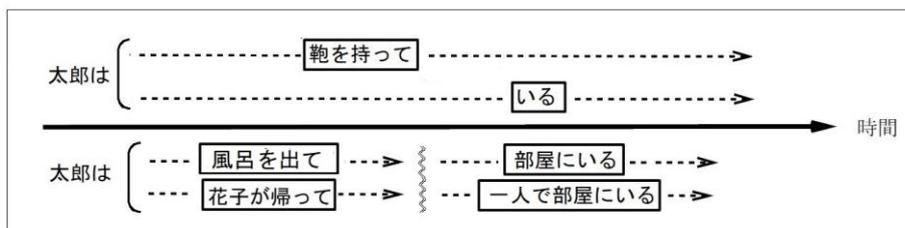


図3

なお、理由を表すB類とさらに構造の異なるC類のテ従属句については、直接関係しないためここではふれない。

さて、「バナナが売っている」におけるテ従属句について考える前に、「売る」という動詞の特性について分析する必要がある。これには2つのケースが考えられる。まず、店員と客がそれぞれ互いにバナナと代金を手渡しているような所有権が移動する状況で「(バナナを)売っている」と言う場合、同時に客は買っている（お金を出して受けとるという行為を行っている）ので、図3において、鞆を持つこととその状態で存在することが共に進行中、あるいは繰り返

し行われていることを表すのと同様であるとみなされ、A類のテ従属句と言える。

ところが、店先に売っているのを見て「バナナが売っている」と言う場合、所有権が移動していない状況にあるので、上のように、代金をもらいながら商品を渡しているわけではない。

これを厳密に描写すると。図4の左の絵のように、客がたとえいなくても、店先にバナナを置いている状況だけを指し、この場合の「売る」は、図4の右の絵のように（イラストは(株)ジャストシステムのフリー素材（一太郎の部品）による）、客との間で代金と商品を直接交換しているという意味ではなく、「店先に置く」、すなわち「売り（に）出す」といった左の絵の示す意味合いを持つことになると考えてよい。

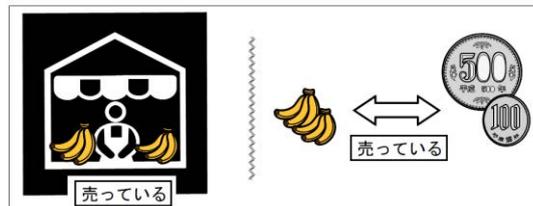


図4

従って、「売る」については、辞書によれば他動詞としての意味として、例えば、「代金を受け取って品物・権利などを渡す。（『広辞苑』第七版）とされているが、ここで考察したことに基づけば、「～が売っている」の「売る」とは「売り（に）出す」という辞書には記載されていない意味に近いとみてよいと考える。「売り出す」という語は同辞書によれば「売りはじめる」とされるように、瞬間的な事態を指す。瞬間的な事態であれば、(22a)の「鞆を持っている」における持続的な事態を表す「持つ」とは違い、述語の核心部「いる」に対して同時同場所の付帯状況を表すのではなく、さらに「売り出している」と言えば、売りはじめるという事態に継起して持続するバナナの存在を表すことが可能になると言える。

つまりここで問題としている「売る」は辞書には記載されていないものの、このように「売り出す」と類義の側面もあると見れば、(23)における「(風呂を)出る」や「帰る」のような瞬間的あるいは比較的短時間で終結する事態を表すことが可能となる。従って、いずれの動詞も店に客がまだいない状況でも使える次の2文はほぼ同義である。

(24) a. 太郎は開店と同時に店頭でバナナを売ったが、すぐに売り切れた。

b. 太郎は開店と同時に店頭でバナナを売り出したが、すぐに売り切れた。

そこで「～が売っている」における「売る」を「売り出す」に置き換えてみよう。

(25) この時期は格安であちこちの店頭で、バナナが売り出している。

なお若干の違和感があるとする話者がいるとしても、(25)は「バナナが売っている」と同程度の自然さで聞こえるものであると稿者は予想する。敢えて両者の違いを言うならば、(25)の場合は店頭で売り出すためにバナナを置く場面が強調され、「バナナが売っている」の場合はバナナが店頭ですでに置かれている場面がより強調されるというニュアンスがあるように思われるが、客が購入するまでの過程における店頭でのバナナの置かれて並んでいるという客観的な状況は同じである。

## 4.2 「～が売っている」の「いる」をめぐる

(25)の構造では、「バナナが売っている」と同じく、「～て」がB類のテ従属句として「事態の継起」を表す役割を持っていると考えられる。つまり、所有権の移動がまだ発生していない段階において、「売り出す」という瞬間的な事態がまず生起し、それに継起する格好でバナナが店頭に並んで存在するという意味で、「バナナがいる」と言うことができるようになるという捉え方が予想できる。そして、この「いる」とは、何がそこに存在するのかを明らかに示さなければならないが、それが「が」で表示された「バナナ」ということになるだろう。「バナナがいる」というのは自然な表現ではないが、文の構造からすれば、そう考えざるを得ない。

少しく考えてみると気づくことだが、文法規範に則った表現形式である「[対象]が～[自動詞]テイル」において自動詞が瞬間的な事態を表す場合であっても、同じく、「いる」とされる主体は「～が」で表される部分である。次例を見られたい。

(26) 人が倒れている。

(27) タクシーが停まっている。

(28) お茶が入っている。

(26)では人が倒れた後引き続いてそこにいることを表し、人が(そこに倒れて)いるという言い方が自然であるのは直感的に認めうるだろう。ただし、(27)では主語が有情物ではなくタクシーであるが、運転手が乗っていて客を待っている状態に捉えられるので、タクシーが停まってそこにいるという捉え方が可能である。実際に「いる」を単独に述語に使っても「駅前にまだタクシーがいる」のように言うことができることから違和感はないだろう。さて、(28)では、「お茶がいる」という理屈になるが、そのままでは言いにくい。これについては後述する。さらには、(29)が示すように、場所を表す助詞には「に」も「で」も使用可能であることは、「に」は「いる」を、「で」は「～て」の他動詞を指向している証拠であろう。すなわち、このことから「～て」と「いる」とに分けてそれぞれを考察しようとする方向性が有効であると考えられる。

(29) a. [バナナが[あちこちの店先で売って]いる]。

b. [あちこちの店先にバナナが[売って]いる]。

なお、自動詞が継続的な事態を表す場合においても、上の考え方を採るならば、同様に、次のように、「いる」とされる主体は、やはり(30)のような有情物に限らず、(31)のように無情物であっても「～が」で表された部分とみなすことができる。つまり、(31)では、無情物のエンジンが回る状態にあることを、「回ってある」と言わずに、敢えて「いる」と表現していると考えられるわけである。

(30) 魚が泳いでいる。

(31) エンジンが回っている。

そこで、(28)のような無情物の主語の場合であっても述語に「ある」ではなく、「いる」が使われることについて吟味、検討することにする。

まず、たまたま手元にあるやや古い辞書によれば、「いる」について、次のように説明されて

いる（一部抜粋する）。

〔人や動物が〕その場所に存在する。その状態にある。また、持続的にとどまる。おる。《参考》古くは「物」についても言った。また、運転手が乗っている自動車のような、人間の意思で動くようなものは、物でも「居る」を使う。（Super 日本語大辞典，2002）

上の説明では、人間の意思で動くものでない場合は「物」については「いる」が使われないことになるが、稿者はそうではないと考える。柴田(1995)に「ある」と「いる」について興味深い言述がある。それは、ふつう「いる」は生き物の存在を「ある」は無生物の存在を表すと考えられがちだが、バスが停留所に止まっているのを見て「あ、バスがある」と言わず「あ、バスがいる」と言うのは、「自分で動いて進むものがとまっている状態にあるからだ」とするものである。

谷守(1999)は起点を表す「を」についての論考だが、上の考え方が、日本語の有情性を問題とする場合にきわめて示唆的であるとして、起点格に「を」が使われる場合の主体が有情物であるかどうかとは基本的に関係がなく、その動きが意志によるものでなくても使える場合があることを示し、「ヲは自らの内に運動する能力・特性を有するものがそれによって分離する点を表す」とした。この捉え方を援用すれば、従前の人や動物といった有情物でなくとも、無情物であっても「自らの内に運動する能力・特性を有するもの」であれば、止まっている状態にあることを「いる」で表すのが、本来の性質であったということになる。ただし、(28)では(31)と違って、止まっているわけではないことから、後でさらに考察を進める。

では、最近の辞書における「いる」の説明をみてみよう。

（動くものが一つの場所に存在する意。現代語では動くを意識したものが存在する意で用い、意識しないものが存在する意の「ある」と使い分ける）①一つの場所を、動かないでいる。とどまる。とまる。（『広辞苑』第七版，2018）

この説明では説明の仕方がさらに発展し、主体の特性ではなく、それを観察する話者がそれが動くを意識したものが存在する、つまり、とどまっているという意味で使うとしている。主体に自ら動くという特性がなくてもよいことになる点でより発展した説明である。

そこで、まず(28)について改めて考察することにする。(28)のお茶自体はどこかへ移動するものではないものの、熱い温度から徐々に冷めていき、やがて飲まれるという動き・変化を伴うものである。そのために一時的に湯呑みに存在することになる。つまり、移動中にとどまるという捉え方にとらわれると、動きとは空間的に移動するという意味で捉えられがちだが、実はそうとは限らない。熱い状態から温度が下がったり飲まれたりするという事態の動きの途上にあるわけであるから、湯呑みに入ったことによってお茶の働き（動き）が一時的に保留されるとも言えるのである。

広辞苑の説明では「一つの場所を、動かないでいる。とどまる」というふうに、移動する途上の場所における存在にこだわった説明がみられるが、実はそうではなく、本稿では、「いる」を次のように定義したい。

(32) 何らかの動きをすると意識される主体が、一時的にとどまった状態を表す。

この捉え方であれば、従前の「いる」の説明に隠された本質的な意味を正確に反映していると考えられる。そう考えることによって、(26)の「人が倒れている」と(28)の「お茶が入っている」のいずれにも、主体の有情性、あるいは、動く意識されるかどうかに関わりなく表れる「いる」に共通する性質で説明することができる。さらに、このことによって、「お茶がいる」とか「エンジンがいる」というように、なぜ動かない（＝移動しない）無情物の主体の存在を表すのに「いる」を使うのかが説明できないだけでなく、これまで説明されることのなかった原理を解き明かすことができる。

(26)(28)(30)(31)の「～て」と「いる」について、事態の生起を時間軸上に図示すると次のようになる。この形式では、自動詞を使っているので、主体が事態を自ら引き起こし（ていると意識され）、一時的にその状態にとどまることを表す。

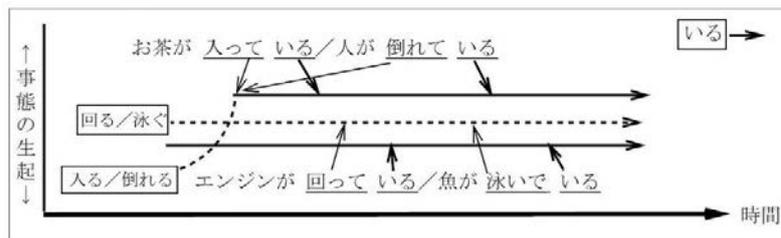


図5

つまり、主体が空間的に動くかどうかに関わりなく、(26)(28)ではそれぞれ「入る」、「倒れる」という事態が生起し、それに続いて主体が一時的にとどまることを示し、(30)(31)では、それぞれ「回る」、「泳ぐ」という事態が存在と時間的に並行して生起することを示している。

#### 4.3 「～が／を + [他動詞]て + ある」について

さて、自動詞に付く「いる」を上で考察したが、本稿での問題は他動詞の後に付く「いる」であるので、ここからは、さらに次の段階の考察へと進めることになる。ただし、その前に、他動詞と「ある」を使った形式もみておく必要がある。

次例を見られたい。

(33) お茶が入れてある。

(34) エンジンがかけてある。

上は「[対象]が～[他動詞]テアル」という形式で、主体には「が」が用いられた例であるが、「～が」の存在は「ある」の主体が「～が」で表されるものであると予想される。

そのことを吟味するために、さらに「[対象]ヲ～[他動詞]テアル」の表現をみる。

(35) お茶を入れてある。

(36) エンジンをかけてある。

この場合の「ある」の主体は何であろうか？お茶を入れたのもエンジンをかけたのも人間の誰かであるが、それがそもそも静止的な存在ではないので、その人間が「ある」とは言いにくい。

そこで、主語を「～は」と「～が」で表して比べてみよう。

(37) 私が/\*はお茶を入れてある。

(38) 私が/\*は エンジンを回してある。

このように、主語を「は」で表すと従属句に係る構造上の不都合が生じるために非文法的になるのではないかと予想する。すなわち、これは「が」と「は」を使った場合の文法的構造の違いが、次のように異なるからであろう。

(39) a. [私がお茶を入れて] ある。

b. \*私は [お茶を入れて] ある。

(40) a. [私がエンジンを回して] ある。

b. \*私は [エンジンを回して] ある。

これは、上の「～て」の従属句は継起の事態を表すB類であるために、その従属句内に「～は」という主語を入れることができないが、「～が」は入れることができるためである。ということは、文末の述語「ある」の主体は「私」ではなく、次のようにそれぞれ「お茶」と「エンジン」であることが判明しよう。下線部が形式上表れる部分になる。

(41) (お茶が) [(私が) お茶を入れて] (ここに) ある。

(42) (エンジンが) [(私が) エンジンを回して] (回った状態に) ある。

これを統語構造の違いが分かりやすくなるように図示すると、次のようになる。

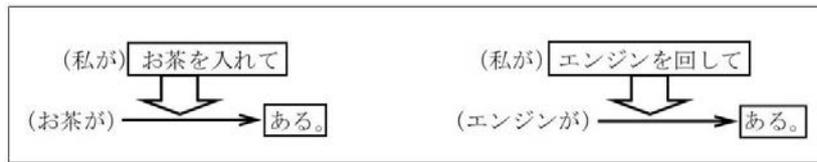


図6

図6を見て分かるように、(41)と(42)では、挿入句である従属句内の他動詞の表す動作を行う主体が話者「私」であり、主文の「ある」の主体は形式上表現されないものの、それぞれ「お茶が」、「エンジンが」として潜在的に存在するとみることができる。

このように文構造を捉えることで、(39b)、(40b)が非文になることが合理的に説明可能となる。なお、「バナナを売ってある」と言えば、話者のいる場所の近くに対象が存在することを表す(35)とは状況が異なり、ふつう対象のバナナは話者の所から離れた販売先に存在することになり、文の意味としては「売らなければならなかったバナナはすで取引先に売ってしまい、現物はそこにある」といったニュアンスを窺わせる特殊な文になろう。

さて、さらに、次のような「[対象]が～[自動詞]テアル」という表現が非文であることについて吟味する。

(43) \*お茶が入ってある。

(44) \*エンジンが回ってある。

これは「[対象]が～[自動詞]テイル」という表現にすれば文法的に正しくなるわけだが、上の文が非文であるのは、主語に自動詞を使っていることにより、その自らの動きとその動きが一時的に自ら保持していることを含意する、つまり、動きが意識されるにもかかわらず、それに引き続いて、「動きを意識しないものの存在」(『広辞苑』第七版)、あるいは静止的な存在を表す

「ある」によって、事態が変化する過程の途中で主体が一時的にとどまった状態、存在するものの動き・変化を意識するものとして表現しているという矛盾が生じるからである。

主体についてその自らの動きを表すはずの自動詞で表すということは、その「動きを意識しないものの存在」(『広辞苑 第七版』)としてではなく、その「動きを意識したものの存在」として表す必要がある。つまり、主体が有情物であるか無情物であるかを問わず、自動詞の後には、その動きを意識するものの一時的状態として表す「いる」を使わなければ不都合が生じるために、「ある」を使った「[対象]が～[自動詞]テアル」という表現が成り立たず、無情物の主語であっても「[対象]が～[自動詞]テイル」というように、「いる」を使った表現で表すのが文法規範に適うことになると考えるのが合理的である。

なお、(44)では、エンジンが回っている時に、エンジンの回転自体には動きが継続しており一時的にとどまっているとは言えないように思われるかもしれないが、この場合は逆に、回転する性能を持つエンジンが自らの動きとして始動していることが一時的な状態であるという意味で、(31)のように「(エンジンがその状態に) いる」と言うのが適切となる。従って、「いる」が表す状態は一時的に止まっている状態とは限らず、(32)をより汎用的な説明に修正して、「いる」の定義を次のようにする。

(45) 事態が変化する過程の途中の一時的な段階における、何らかの動きをすると意識される主体の状態を表す。

この考えをもとに検討すると、(35)と(36)の表現において他動詞（それぞれ「入れる」「かける」）で表されたのは、あくまで文の主語にある主体自らの動きではなく、他にいる別の者が働きかけた対象であるその主体にもたらされた動き・作用であり、自ら動きを発生させたわけではない主体については、あくまで静止的な存在でしかないために、「いる」ではなく「ある」で表現されなければならないと考えるのが合理的である。文の主体以外にいる別の者が（お茶を）入れたり（エンジンを）かけたりする動作によって、主体に変化がもたらされるが、その主体自体はその変化を外からもたらされたのであり、変化させられた後も、自動詞で表されるような自らの動きの一過程としてではなく、ただなされるがままに存在するということである。

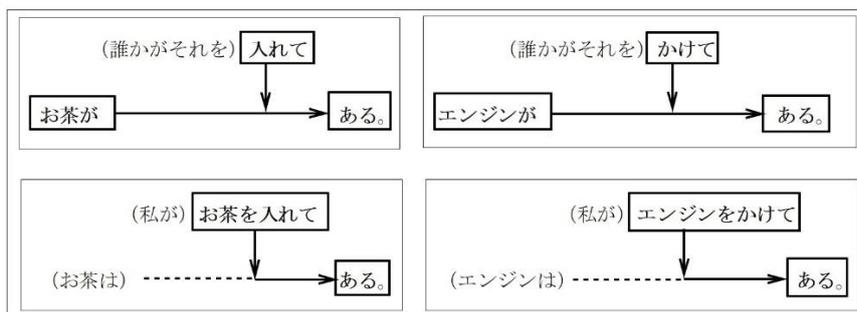


図7

(33)-(34)と(35)-(36)とが、「～が／を～て～ある」という構造において共通性があることを示すと、図7のようになる。図7において、四角で囲った太字の文成分が繋がってそれぞれのタイプの文になるという捉え方である。例えば、「お茶が入れてある」の場合は、「お茶がある」

という主文に「誰かがお茶を入れて」という含意の「入れて」が挿入されるのに対して、「お茶を入れてある」の場合は、含意される主語の「お茶は」は表現として表れず、「(私が) お茶を入れて」という句が挿入される。実際、完全な形と言うならば、それぞれ「誰かがお茶を入れて、そのお茶がそこにある」, 「私がお茶を入れて、そのお茶はそこにある」ということになる。

#### 4.4 「～が+他動詞て+ある」から「～が+他動詞て+いる」へ

上で、「その商品はデパートに売ってあった。」のように言う九州の一部地域の方言の事例を紹介したが、稿者自身は言わないものの、稿者の周辺で兵庫県南部（淡路島）の出身者でも「イチゴが売ってあった。」のような言い方は聞いたりしたりするという者がいる。体系的な調査はしないが、こういった形式の方言が散在することが予想される。

こうした方言に残存すると思われる形「～が+他動詞て+ある」を前提として考えれば、本稿で扱う表現形式の成立の流れが合理的に説明できるとみられる。すなわち、そもそも方言の形は本来の正統な形式である。つまり、4.3 でみた(33)の「お茶が入れてある」という形式に当たる。根底では同じ構造を持つとした「お茶を入れてある」の場合は、主に話者がお茶を入れた場合であり、バナナの販売の場合は話者でなく店が仕手であるので、「お茶が入れてある」の形式に当てはめるのが妥当であろう。それが方言で言うところの「バナナが売ってある」に相当することになる。

ここで、「ある」と「いる」との違いに関する上の考察をもとに、上の方言形の「ある」が「いる」に変容したとみる考えを述べる。最近の辞書の説明を一部再掲すると、「動くものが一つの場所に存在する意。現代語では動くを意識したものが存在する意で用い…」(『広辞苑』第七版)とあるが、「一つの場所に存在する」とする捉え方を、本稿では、(45)において「事態が変化する過程の途中の一時的な段階」とした。すなわち、本稿では、「いる」の言及する主体については、存在するという事態に限定せずに、その有り様としての動きが一時的にとどまるかまたは変化する状態も含めたわけであるが、方言で「バナナが売ってある」と言えば、「商品が店においてあって、買いたい人が店員に『これをください』といって買う場合」に使う表現であるという前掲の証言に窺えるように、バナナが何らかの動きをすると意識されない主体として、ただお店に（静止的に置かれて）あるものにすぎず、そのバナナに対して動的に働きかけるのは「これをください」と言って静止状態から移動させようとする「買いたい人」であるということが窺えるのに対して、同じ方言話者が「バナナが売っている」と言えば、「販売する側が積極的に客に対してアピールしながら売の場合」に使う表現であるという証言から窺えるように、ただお店に置かれることが静止状態ではなく、「売りに出されていくという変動する事態の過程上の一時的な状態」ととどまっていると捉えることによって、「いる」が選ばれるメカニズムが働いていると考えられる。

このように考えれば、まさしく、待機状態から乗客を乗せて走り出すという変動する事態の過程上の一時的な状態として路上で待機していることを表すのに「いる」が選ばれるメカニズムが働いて、主体が物であっても「まだ駅前にタクシーがいる」と言えるのと同じく、店が売りに出したバナナについて、店先に並べられ待機し次々とバナナが売れていくという動的な過

程上の一時的な状態として店頭で待機していることを表すのに「いる」が選ばれるメカニズムが働いて、店先に「いる」ということになる。

つまり、「バナナが売ってある」と言うのは、ただ店先にバナナがおいてあることに言及し、買いたい人に持って行かれるだけの静止的な存在を言う場合である。ちなみに、ふつうに「バナナを売っている」という従前よりの表現では、バナナを売る人が変動する事態の過程上の一時的な売るという状態にいることになる。

本稿でここまで考察した一連の表現形式の系図を、「～ている／ある」を成句とはみなさずに、「～て」の部分の主文の「～がいる／ある」の文中に挿入されたとみなす従属句として、そのタイプを分類しつつ、次に図示する。表現に表れる部分を太字で示す。



図8

図8において、主体「～が」と文末の「ある／いる」、及びその間に挿入される「～て」の従属句のどの組み合わせのパターンであっても、文の当該各部分は統語論的に同じ配置の仕方で統一的・整合的に置かれることを示した。そして、主体がどのような有り様にあるかによって文末が「ある」になるのか「いる」になるのかが分かるように示した。

さて、図8を見てさらに分かることは、1.と2.の文末が「いる」の場合は「～て」がA類、3.と4.のように「ある」の場合はB類になることが基本であり、その中で、本稿で扱う表現の形式が、4.のパターンから派生してきたものだということがみてとれるが、そういうことから、「バナナが売っている」の表現が基本的な体系の一部から、またこの箇所からあらたに発生してきた文法形式なのかが窺えよう。なお、この新しい形式以外については、この類型によって主体が有情物になるか無情物になるかという区別は、4.の型について「弟が父親が叱ってある」のように言えることから、基本的にないともてよい。

## 5 まとめ

これまでにみた4つの型に付随する格好で、本稿で検討した「バナナが売っている」が発生しているとみたことを受けて、「バナナが売っている」を5番目の型として加え、主体の有り様、従属句「～て」の類とその表す意味、「～て」の動詞が他動詞か自動詞か、それに見合った文末の動詞が「いる」になるか「ある」になるかをまとめると、表1のようになる。

表1

No.	主体の有り様	従属句「～て」の類と表す意味	「～て」の動詞	文末の動詞
1.	一時的な状態	A 類：同空間・同時間付帯状況	他動詞	いる
2.			自動詞	
3.	静止的な状態	B 類：継起する先行の事態	他動詞	ある
4.				
5.	一時的な状態	B 類：継起する先行の事態	他動詞	いる

すなわち、従属句としての「～て」に入る他動詞が「(店が) 売る」であり、それが意味的には「(店が) 売り出す」というニュアンスを持つことで、「～て」が継起する先行する事態を表す B 類となるために、「売る」の主語として含意される「店が」が従属句内に入ることができ、そのことによって、主語が表す主体の有り様が一時的状態にあるという解釈をすることで、そこに「バナナが」を置くことが可能になるとみるわけである。

従って、こうした捉え方には従前の文法理論に符合するメカニズムが組み込まれており、敢えて他動詞の「売る」を（疑似）自動詞として読み換える必要もなくなるというメリットがある。

本稿の捉え方によれば、「売る」に限定されずに、他動詞（的な表現）であってもこの新しい文法形式の条件と発話の状況に合えば、将来的には使用される可能性を持っていると予想できる。稿者なりに創作してみると、例えば、「～を出しっ放しにする」を使って、流れる水の一時的状態について、あるいは、「～を展示する」を使って、次々と商品が出される過程における途中の状況について述べるような場合に、次のように言える可能性が出てくるのではないかと予想する。

(45) 公園の水が出しっぱなしにしている。

(46) 展示即売会に次々と新商品が展示している。

以上、本稿では、「バナナが売っている」においては、「店員が店先でバナナを売り出して（売って）、そのバナナが店先にいる」という構造が機能していることを示したことになる。

## 参考文献

- [1] 柴田武(1995)『日本語はおもしろい』岩波書店。
- [2] 田川拓海(2002)「疑似自動詞の派生について－『イチゴが売っている』という表現－」, 『筑波応用言語学研究』9, 15-28.
- [3] 谷守正寛(1999)「分離点を表すヲとカラ, および有情性について」, 『鳥取大学教育地域科学部紀要 教育・人文科学』第1巻第1号, pp.275-283.
- [4] 又平恵美子(2001)「『イチゴが売っている』という表現」, 『筑波日本語研究』6, 93-102.
- [5] 南不二男(1974)『現代日本語の構造』, 大修館書店。
- [6] 南不二男(1993)『現代日本語の輪郭』, 大修館書店。